チュウサギ

区分	環境省レッドリスト：準絶滅危惧
分布	日本には夏鳥として普通に渡来し、本州から九州までの各地で繁殖する。西南日本では稀に残留するものがある。(1)
生態	水田や湿地で生活し、川の流れの中や干潟に出ることは少ない。繁殖はコサギ、ダイサギ、アマサギ、ゴイサギとともに平地の林に集団で繁殖コロニーをつくる。(1)
配慮事項	河川区間内のヤナギ林や竹林等は、サギ類の集団営巣地やねぐらとなっていることが多いので、樹林の伐採や護岸整備による水際線の改変等の諸工事を行う場合は、事前の生息調査が必要である。営巣地・ねぐらとなっている樹林は極力保全することが望ましいが、やむをえず伐採する場合は、繁殖期を避けたり、代替地となる植生を残すといった配慮が必要である。サギ類の集団が生活するには、付近に豊富で安全な餌場があることが大切である。河川や水田の水質や底質を保全するほか、農薬などが餌生物を通じて濃縮されないように安全面でも配慮することが必要である。(1)

(1) 川の生物図典、財団法人 リバーフロント整備センター、1996

コサギ

分布	本州以南で繁殖。年間を通じて同じ地域にとどまるもの以外に、日本国内で地域的な移動をするものやフィリピン方面へ渡って越冬するものがいる。(1)
生態	日本で見られるなシラサギ類のなかで最も数が多く、体は一番小さい。昼行性で、日中は水田、河川、湖沼、湿地、干潟などの水辺で採食し、マツ林、ヤナギ林、竹林、雑木林などを集団ねぐらまたは集団営巣地とする。(1)
配慮事項	河川区間内のヤナギ林や竹林等は、サギ類の集団営巣地やねぐらとなっていることが多いので、樹林の伐採や護岸整備による水際線の改変等の諸工事を行う場合は、事前の生息調査が必要である。営巣地・ねぐらとなっている樹林は極力保全することが望ましいが、やむをえず伐採する場合は、繁殖期を避けたり、代替地となる植生を残すといった配慮が必要である。サギ類の集団が生活するには、付近に豊富で安全な餌場があることが大切である。河川や水田の水質や底質を保全するほか、農薬などが餌生物を通じて濃縮されないように安全面でも配慮することが必要である。(2)

(1) 日本動物大百科、日高敏隆、1996
(2) 川の生物図典、財団法人 リバーフロント整備センター、1996

アオサギ

分布	日本では北海道から九州に分布し、北海道では留鳥または漂鳥、九州以南では冬鳥である。[1]
生態	日本のサギ類としては最大の種である。河川、湖沼、水田、湿地、干潟などの水辺で見られ、山地にはまれである。繁殖は、平地から丘陵地のマツ林、スギ林または広葉樹林に数十羽から数百羽の集団でコロニーをつくって行う。ほかのサギ類と混群で営巣することもあるが、本種だけでコロニーをつくることの方が普通である。[1]
配慮事項	河川区間内のヤナギ林や竹林等は、サギ類の集団営巣地やねぐらとなっていることが多いので、樹林の伐採や護岸整備による水際線の改変等の諸工事を行う場合は、事前の生息調査が必要である。営巣地・ねぐらとなっている樹林は極力保全することが望ましいが、やむをえず伐採する場合は、繁殖期を避けたり、代替地となる植生を残すといった配慮が必要である。サギ類の集団が生活するには、付近に豊富で安全な餌場があることが大切である。河川や水田の水質や底質を保全するほか、農薬などが餌生物を通じて濃縮されないように安全面でも配慮することが必要である。[2]

(1) 日本動物大百科、日高敏隆、1996

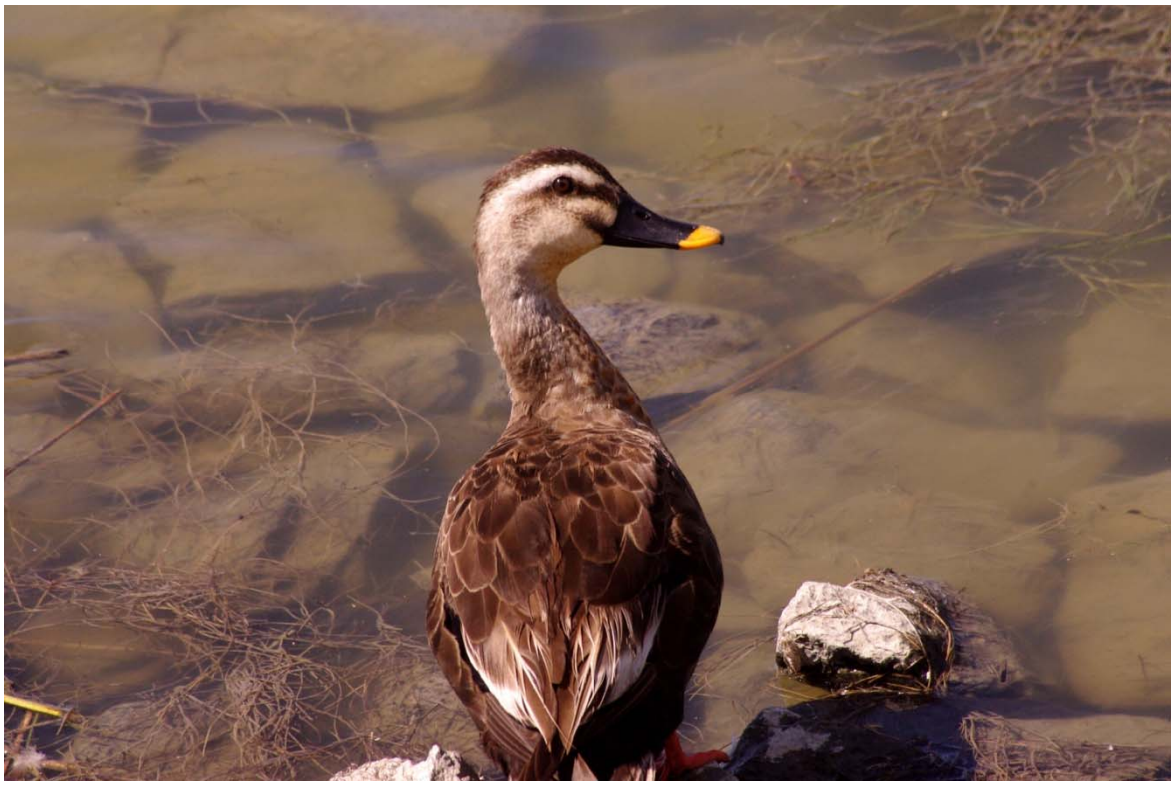
(2) 川の生物図典、財団法人 リバーフロント整備センター、1996

オシドリ

区分	環境省レッドリスト：情報不足 宮崎県版レッドリスト：情報不足
分布	おもに中部地方以北で繁殖し、冬季は、西日本で越冬するものが多い。北海道では夏鳥。[1]
生態	日本では平地から山地にかけて生息し、とくに広葉樹がおおいかぶさるような薄暗い水辺を好む。林を好む習性は、ほかのカモ類と異なって、枝の上を休息場所やねぐらとし、樹洞を使って繁殖することとも関係している。[1]

（1） 日本動物大百科、日高敏隆、1996

カルガモ



分布	アジアの温帯から熱帯で繁殖し、日本でも全国の低地で普通に繁殖する。(1)
生態	水辺近くの草むらや休耕田、竹藪などの乾いた地上に営巣する。小さな川でも繁殖する。(1)
配慮事項	繁殖期にはササ、ヨシ群落、丈の高い水草など、遮断効果のある植生が重要であり、これらを保全する必要がある。また、中洲や浮島など、他の動物が近づきにくい環境も重要である。群れで生活することが多いので、休息のための広い静水域や採餌のための草地や水草が多いことが望ましい。鳥獣保護区や銃猟禁止区域となっている区域が、休息や睡眠に安全な場所として生息密度が高くなる傾向がみられる。(1)

(1) 川の生物図典、財団法人　リバーフロント整備センター、1996